2019年6月3日(月) 東奥日報17面掲載

九州―沖縄 物流ルート

縄文時代 土器調査で弘大証明

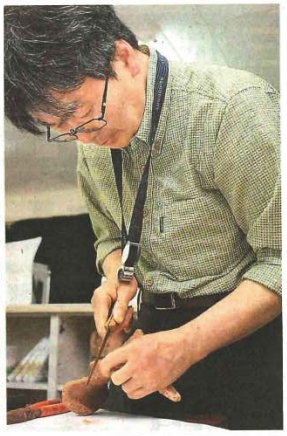
「火山ガラス」特性を利用

沖縄県で見つかった縄文時代の土器のうち、現地で作られたものではないとみられる「非在地系土器」が九州から運ばれていたことが、弘前大学の研究チームによる調査で分かった。土器に使われた土に含まれる火山由来の粒子「火山ガラス」が、九州地方の火山から噴出したものであることが確認されたもので、九州と沖縄との物流ルートの存在が、科学的な手法で浮き彫りになった。（外崎英明）

研究グループは、弘大人文社会科学部の関根達人教授、同大大学院理工学研究科の柴正敏名誉教授、同博士後期課程の近藤美左紀さんら。マグマが急に冷やされて固まってできる火山ガラスは、火山それぞれで化学組成が異なるため、土器が作られた地域を一定程度の範囲で特定することができる。研究チームはこの特性を利用して、各地の土器の地域間移動や模倣、それに伴う人の動きなどの調査を継続して行っている。

2017年には、沖縄県北谷町で発見された亀ケ岡系の土器の破片の来歴を調査し、九州南端の海底にあり、約7300年前に起き、西日本一帯に火山灰を降らせた「鬼界アカホヤ噴火」由来の火山ガラスが確認され、西日本で作られた模造品と特定。亀ケ岡系の本場である本県など北日本の「情報」が「人」の媒介で南に伝えられ、西日本で「情報」によって模倣されて「物」となり、沖縄まで移動した、という流れを解明し話題となった。

研究チームはこの際、北谷町で出土した土器で、その型式などから現地で作られたと見られる「在地系」と、「非在地系」土器のサンプル16点を同町教育委員会から提供されていた。このほど分析結果がまとまり、5月に東京の駒澤大学で開かれた日本考古学会の総会で公表した。



沖縄出土の土器片からサンプルを採取する柴教授（当時）＝2017年5月、沖縄県北谷町教育委員会

16点のうち、火山ガラスが認められた土は、いずれも非在地系の4点。これらには、鹿児島県中央部の桜島を生んだ姶良カルデラなど、南九州地方の火山を起源とする火山ガラスが含まれていた。

このほか、火山ガラスが含まれていなかったもののうち鉱物の組み合わせが特殊な「変成岩」が含まれていたサンプルが一つあり、その組成から九州北西部のものだと分かった。

一方、在地系の土器には、いずれも火山ガラスは含まれていなかった。この対照から、非在地系が九州から運び込まれたことが証明され、型式に基づく判別の結果とも合致する形となった。

研究グループはこれまで、北海道の非在地系土器が、津軽海峡を渡り本県から運ばれたことなども火山ガラスで証明しており、関根教授は2日までの取材に「北と南の海を挟んだ地域同士の人や物の動きを明らかにしていきたい」と話した。

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が
利用を許諾したものです。
東奥日報社に無断で転載することを禁止します。
[問合せ先]弘前大学理工学研究科
E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp